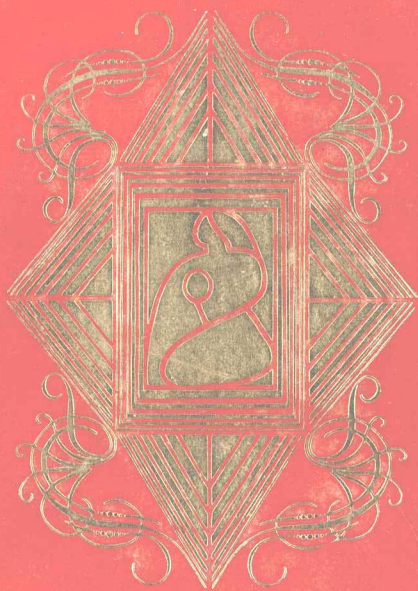


書き下ろし 新事件小説全集
1



佐賀 潜

抜け穴

書き下ろし 新事件小説全集 1

抜け穴^{ぬけあな}

昭和四十三年三月十五日 第一刷

著者 佐賀^{さが} 潜^{せん}

発行者 鈴木敏夫

発行所 読売新聞社

東京都中央区銀座西三の一
大阪市北区野崎町七七
北九州市小倉区中津口七三の二五

印刷所 凸版印刷株式会社

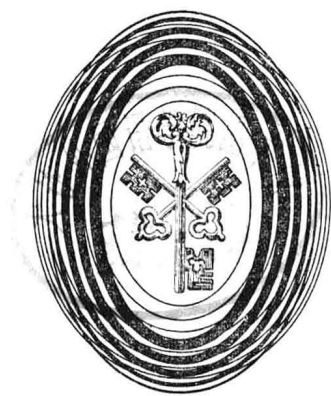
製本所 株式会社堅省堂・協和製本株式会社

定価 三八〇円

©, 1968 SEN SAGA Printed in Japan

穴 け 抜

佐賀 潜



読 売 新 聞 社

目次

第一章	ある男	7
第二章	狙う眼	44
第三章	狂信者	81
第四章	泥酔者	118

第五章	女人像	160
-----	-----	-----

第六章	稻荷教	198
-----	-----	-----

第七章	崩壊図	237
-----	-----	-----

抜 け 穴

第一章 あ る 男

1

水城連三は、畳にごろ寝をしていた。

何か夢をみていたようだが、はっきりしない。別れた女房の顔に似た女が、自分にまつわりついていて記憶がある。何もかもが混沌こんとんとしていて、濃い霧の中にいるような気がする。

水城は、薄眼うすめをあけた。座敷だ。しかも自分の体からだに、羽根布団が掛けてある。ぼんやりと明りがさしている。彼は、光源を求めて、視線を向ける。座敷の隅すみのテーブルにスタンドが灯り、その前に、軽部新太郎かるべが坐り、何やら書類を見ている。

腕時計を覗いた。のぞ午前一時を指している。水城は、自分が、軽部の家に寝ている事態を考えた。へ例の如く、酔いつぶれた。ひどく酔いのまわりが早かったようだ。最初は、新宿のバーだ。銀座へ出た。眼の大きなホステスがいたようだ。スコッチをあおるように飲み、もう一軒、どこかへ行

うたはずだ。あとは、なんにも覚えちゃいない。彼は、そんなことを考え、枕元のグラスを握み、水を注いだ。

「おい、眼をさましたかい」

軽部が、声をかけた。

「ゆんべは、だいぶ厄介をかけたらしいな」

水城は、グラスの水を飲み、タバコをくわえた。軽部が、そばへ寄ってきた。

「ゆうべは、荒れたぞ。でもな、慣れっこだから、なんとも思っちゃおらん。お前の飲みっぷりは文字どおり鯨飲だな。ああ飲んじゃ、からだが持たんぞ」

軽部は、枕元にあぐらを掻き、ライターの火を、水城に移してくれた。

「今の俺に取っちゃ、酒だけだ。ことわっとくが自棄酒じゃないぞ。簡単にいえば、好きだからだ。酒に溺れ、酔って巷を彷徨する。女房もなければ、住むところもない。銭もなければ望みもない。これでいいと思っちゃいないが、俺に何ができるというんだ」

水城は、そう言って苦笑した。

「お前の心境、判らぬでもない。が、昨夜頼んだこと……引受けてくれるんだろうな」

軽部が、やわらかく言った。水城は、一瞬、なんのことか——と考えた。どこかの観光会社へ就職をきめたから、近日中に、出社してくれというような話だった。

「何か、頼まれたな」

水城は、起き上ると布団の上にあぐらをかいた。

「頼りないんだな。しっかりしてくれ。僕の銀行に取っちゃ大問題……もっともお前にすれば、興味の無いことかもしれん。四億円が吹つとべば、僕のクビもとぶんだ。今さら、親父のことを持ち出したかないが、親父が、現在、頭取だったとしたら、どうするだろう。親父が頭取をしてれば、今度の融資は断ったはずだ。親父は、地方銀行が、大銀行なみの派手なことをやっちゃいかん——という持論だった。その代り、南北銀行は、現在のような五大銀行の一つにまでのし上らなかつたろう。現頭取岡倉さんは、うちの銀行を、大銀行までのし上げた。政治力をフルに使ったからさ。そのひずみが、幾つか現われている」

「銀行談義なんか、聞きたかねえな」

水城の語氣に刺が^{とげ}あった。水城は、軽部の顔をのぞいた。自分の語氣に、多少の反省が湧いたからだ。軽部は、答えず、はなれて置いてある瀬戸火鉢^{ひばち}を引よせると、電熱器の上に金網をのせ、餅^{もち}をならべた。

水城は、その動作を横目で睨^{にら}みながら、タバコを吹かしていた。軽部は、火鉢の餅^{もち}を眺^{なが}めている。その横顔をみつめ、水城は、軽部との血のつながりを考えた。

へ兄弟だが、一緒に育ったことはない。俺は、この兄に、いつも何かの抵抗を持ってきた。親父は同じだが、おふくろは違う。軽部は正妻の子、俺は、妾腹^{しやうふく}の生れ……俺にも軽部にもかわりあいのないことだが、長ずるにつれ、出生のちがいに腹を立てた。大学を出て、親父の指図どおり、南

北銀行系列の共進工業株式会社へ入社。サラリーマンなんか、凡そ性に合わねえが、酒代を稼ぐために働いたようなもんだ。上役と衝突しちゃったが、俺の退社は、親父が死んだときから、決ってたようなもんだ。退職金は、二十日とたたぬうちに、消えちゃった。軽部にずいぶん世話になった。軽部は、融資先の会社へ、俺をお目附役として、はめこもうという。ふん……軽部らしい抜け目のねえ考えだ〜

水城は、餅の焼ける匂いに、空腹を覚えた。料理らしいものはほとんど口にせず、ただ、胃の腑へ酒を流しこんでいたからだ。

軽部が、醬油をつけ海苔を巻いた餅を皿にならべ、「どうだ。腹へったろ。僕も空腹だ」といつて、畳の上に置いた。水城は、それをつまんだ。二人は、水を飲み、たちまち焼餅をたいらげた。

「お前の寝顔をみてたが、ぎょっとするくらい、親父そっくりだった。酒の飲みっぷりもよく似ているし、酔うと饒舌となり、しゃべりまくるところなど……まるっきり親父だった。が、親父は、頑健な体だったから、六十六歳まで生きたが、お前は、どうか弱々しいところがある。健康をそこねる危険もあるぞ。酒は、ほどほどにするんだな」

軽部の言葉に、真情がこもっている。

「判った。ところで、観光会社への就職の件、もう一度話してくれ。はっきり覚えちゃいないんだ」

「相手は、ファミリーアル観光株式会社というんだ。資本金は六千万円、本社は、築地にある。事業

は、中小企業の社員の福利厚生のため、温泉地、山間、海浜などに、ホテルを建て、ただみたいな安い値段で宿泊させることを目的としている」

「つまり、中小企業体を、会員に募集し、会費を集め、その金で設備投資をまかなうわけだな」

「そういうわけだ。その会社へ、うちの銀行は、四億円を融通してある。岡倉頭取は、貸したくなかった。けどな、相手は大きな政治力を使って、圧力をかけてきた。断りきれない羽目に追いこまれ、金を貸したんだ」

「担保は？」

「現在、二億円前後の不動産を取っている。もしバンクしたら、二億円の損をかぶらにゃならん。東京支店長としての僕の責任になる。二億の損を銀行にかけながら、現職にとどまっているわけにはいかない。辞表を出さざるを得ん」

「で、会社は、目下あぶないのか」

「現状は、大丈夫だ。けど、僕の勘じゃ、危険な要素があるようなんだ。第一が、人的構成……社長の田丸信人^{のぶと}は、まだ四十代になったばかりの男だが、いわゆるやり手じゃない。変ってるんだ。

たぶん、神がかり的なところがあり、とてつもないアイデアを発想する。学歴も大した経歴もない。ワンマンで、社員の統率は、軍隊式で、特異な熱弁の持主だ。取締役会々長として、第三銀行の重役をしていたことのある立川金吾がいる。会長と社長の間が、うまくいっていない。社長の直系に、神崎朝武という常務がいる。これが経理を握っている。会長と気脈を通じているのが、専務

「南北銀行以外の借入金は？」

「第三銀行が、五、六千万……あとは殆どないようだ」

「南北銀行は、政治力に押され、四億という大金を出したというが、そのいきさつを聞かしてくれ。なんだか、スパイの役目を引受けたくなつたんでな」

「そうか、ありがたいことだ。まあ、聞いてくれ」

軽部は、水城が気持を動かしたのを知ってか、暗れやかな表情となり、融資の経過を語りだした。

昭和四十年十二月中旬――。

名古屋の南北銀行の本社へ、憲民党の河原大作が訪ねてきた。前もって、岡倉頭取に電話があり、「わしの関係筋の会社へ、ちいとはかり銭を貸してやって貰いたい。将来は、大した大ものとなる見込みがある。ついては、東京支店の軽部君も、呼んでおいてくれんか。貸すとなれば、東京の店が窓口となるはずだから」と、言ってきた。

岡倉頭取は、軽部を東京から呼寄せ、二人で河原と会った。

河原大作は、東海地区S県出身の代議士で、当選十三回の長老であった。防衛庁長官、通産大臣、大蔵大臣を歴任し、党内では海野満司派に属し、海野が前年病死してから、その跡を継ぎ、憲民党内でも、重きをなしていた。首相工藤陸郎とも手を結び、その翌春の内閣改造では、入閣必至と噂が高かった。

河原は、朴訥な人柄で、派手な金集めをやらす、戦後の政治の流れの中でも、主役を演ずることなく、いつも脇役にまわっていた。そのため、いまだかつて汚職の噂を立てられたこともなく、財界の一部では、彼を支持する者がいた。

南北銀行は、昭和三十二年、二代目頭取、軽部連太郎が死亡するまでは、地方銀行にすぎなかった。三代目頭取に就任した岡倉重民は、若い頃から、G県出身の海野満司の知遇をうけ、海野が憲民党内で、勢力を伸張していくにつれ、政治と深いつながりを持つようになった。

彼は、三代目頭取となると、政治を足がかりとして、中央進出をめざした。政界の大物たちのあっせんで、一流会社と取引を結び、遂に、五大銀行の一つにまでのし上げた。その預金総額は、一兆円に近づき、東京に総合支店を設置し、都内に十五カ所の支店をこしらえた。

したがって、岡倉としては、河原大作が、わざわざ融資あっせんのため、名古屋まで来てくれると聞いて、異状なほどの緊張感を抱いたのである。

彼は、約束の時間になると、本店の玄関に立ち、河原の自動車を迎えた。一メートル六十センチそこそこの小柄な河原が、車から降り立ち、右手を軽くあげて、岡倉に会釈した。岡倉は、小走りに歩ゆみ寄り、腰を折りまげていんぎんに挨拶した。

軽部は、二人の様子を眺め、今更のように政治の力を、痛いほど感じ取った。亡父連太郎は、政治がいだった。へ銀行屋が、政治家と手を握るのは角力のごひいきと同じで、道楽じゃ。道楽は、金がかかる。道楽にもいろいろあるが、女、酒、勝負事は金が必要。ところが、それにも増して金

が出ていくのが政治じゃ。こいつは、際限がない。銀行屋は、他人さまの金を預るのが商売……大きな水槽に水が流れこむように、金が貯^たまっていく。こいつを、利息を取って他人さまに貸すんじやから、ありがたい商売じや。ところが、政治道楽は、水槽に抜け穴があるように、金を吸いこんでいく。時には、抜け穴から沁^しみこんだ水が、地下資源となることもあるが、そんなことは、めったにあるもんじやない。水槽に抜け穴があったらいかん」というのが、亡父の口癖だった。

皮張りのソファに、河原が胸を反^そらせて坐った。小柄な体を大きく見せるため、不自然なくらい、胸を張るのだろう。色黒で出っ歯の顔は、狸^{たぬき}を思い出させたし、てらてら光る頭は、下卑た感じがした。

「大阪へ行くついでに、寄らせてもらうた。南北銀行も、だいぶ大きくなったようで、結構じやな。よろこんどるよ。地方銀行が、十年足らずの間に、中央へ進出した例はないな。ま、大いにやってくれ給え」

河原は、ふくらんだ腹をゆきぶって笑った。岡倉は、なんども頭を下げ、「みんな先生のおかげです。今後ともよろしく、お願いいたしますです」と言った。

「ところで、今日きたのは、融資の口じやよ。東京の築地に、ファミリアル観光という会社がある。中小企業者の社員、従業員のレジャー施設をこしらえ、彼らの福利厚生をはかるのが目的なんだ。すでに熱海に、ファミリアルホテルを建設しよった。毎日、会員の従業員たちが、押すな押すな盛況だよ。何しろ、一泊五百円しか取らん。つまり会員は、二、三十万円の会費を払い込んだだけで、